昭和58年9月1日

No.62

# 佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号　TEL0952(24)3947

## 画室内

黒田　清輝作　一八八九年（明治二二）

「画室の一隅」（東京国立文化財研究所蔵）と同年作と思われる。寝台、カーテン、机と椅子、壁にかけられた絵はまったく変らぬ状態である。ただ大きく違っているのは、湯気を上げるやかんをのせたストーブが部屋の一隅を占めていることである。筆致は、こまやかで、作品全体は力強く、丁寧な仕上がりを見せている。画面右上、二曲の屏風の画中に「源清輝筆」と銘記する。黒田二十三歳、法律学をすて、絵画に専念しはじめたころの作品である。明治二二年二月二八日付母宛書簡はこの間の事情を語っている。「…がっかうからかへってからまたうちでゑをかきます　てほんになるひとをたのんでかくとよろしゅうございますけれどもなかなかこのほうハおかねがかゝりますからたゞわたしのへやのすみっこのねだいのあるところのふうなどをかいてをります……」

目次

○黒田清輝作「画室内」……1
○「近代・九州の洋画家たち」展 開催要項……2
○出品目録……2～4
○作家解説……5～7
○行事案内……8

県政百年・佐賀県立美術館開館記念

## 近代・九州の洋画家たち展開催要項

**名　称**：近代・九州の洋画家たち

**主　旨**：日本の近代洋画の形成にあたり、九州出身の洋画家たちが果した役割は大きい。
今回の展覧会は、この近代洋画が形成され、展開してゆく中で、九州出身の洋画家に注目をし各々の画家の個性と、かれらが担った時代性を見ようとするものである。
とくに、わが国で組織的な西洋美術の教育が施された工部美術学校の創立（明治９年）から、外光派の導入、白馬会の設立をへて、さらに文展の開設へと移行する時期に焦点をあて、明治大正の洋画史の流れをふりかえるものである。

**主　催**：佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀県立美術館

**後　援**：文化庁、九州・沖縄各県教育委員会

**会　場**：佐賀県立美術館
（佐賀市城内1丁目15-23　Tel(0952)24-3947）

**会　期**：昭和58年10月９日(日)～11月６日(日)
（休館日　10月11日・17日・24日・31日）

**講演会**：日　時　10月23日(日)午後１：30
場　所　佐賀県立美術館研修室
講演者　三輪英夫
（東京国立文化財研究所美術部）
演　題　近代洋画と九州の作家たち

**観覧料**：

| | 個　人 | 団　体(20名以上) |
|---|---|---|
| 大　人 | 500円 | 400円 |
| 大・高生 | 250円 | 100円 |
| 中・小生 | 150円 | 100円 |

**展示内容**：油彩画116点

2．三田製紙所

10．画　　室

### 作　品　目　録

| No. | 作品名 | 制作年 | 寸法 | 所蔵 |
|---|---|---|---|---|
| | **床次　正精** | | | |
| 1 | 松島図 | 1875(明８)頃 | 59.0× 89.5 | 宮城県美術館 |
| 2 | 三田製紙所 | 1880（明13） | 90.0×120.0 | 紙の博物館 |
| 3 | 西郷隆盛像 | 明治中頃 | 182.3×105.9 | 鹿児島市立美術館 |
| 4 | 妙義山 | 年代未詳 | 54.7×100.4 | |
| | **百武　兼行** | | | |
| 5 | バーナード城下絵 | 1878(明11)頃 | 40.5× 55.5 | 佐賀県立美術館 |
| 6 | 老婦人像 | 1879(明12)頃 | 41.0× 32.0 | 〃 |
| 7 | マンドリンを持つ少女 | 1879（明12） | 114.0× 82.0 | |
| 8 | タンバリンを持つ少女 | 1881(明14)頃 | 65.5× 54.5 | |
| 9 | 臥裸婦 | 〃 | 97.0×187.0 | 石橋美術館 |
| 10 | 画室 | 〃 | 46.0× 55.7 | |
| 11 | ブルガリアの少女 | 1882（明15） | 93.3× 71.0 | |
| 12 | ネメアの獅子と闘うヘラクレス(伝百武) | 1882(明15)頃 | 198.7×160.3 | 霞会館 |
| | **諫山　麗吉** | | | |
| 13 | 沈堕の瀧 | 1901（明34） | 88.5×130.0 | 大分県立芸術会館 |
| 14 | 富士の図 | 1905（明38） | 91.5×130.0 | 〃 |
| | **藤　雅三** | | | |
| 15 | 静物（ざくろ） | 年代未詳 | 50.3× 40.5 | 神奈川県立近代美術館 |
| 16 | 男子モデル頭部 | 〃 | 65.0× 50.0 | 東京芸大芸術資料館 |
| 17 | 兵士午睡図 | 1877(明10)頃 | 29.0× 45.5 | 〃 |
| | **曽山　幸彦** | | | |
| 18 | 日光陽明門 | 1890（明23） | 72.0×104.5 | 東京国立博物館 |
| 19 | 白鷺 | 年代未詳 | 23.0× 39.2 | 黎明館 |
| 20 | 雁 | 〃 | 23.5× 37.4 | 〃 |
| 21 | 風景 | 〃 | 45.5× 69.5 | 宮城県美術館 |
| | **彭城　貞徳** | | | |
| 22 | 和洋合奏の図 | 1906(明39)頃 | 73.2×150.4 | 長崎県立美術博物館 |
| 23 | 長崎港の夜 | 1911(明44)頃 | 53.0×151.0 | 〃 |
| 24 | 富士山 | 年代未詳 | 36.8× 49.3 | 長崎図書館 |
| | **吉田嘉三郎** | | | |
| 25 | 海魚図 | 年代未詳 | 41.0× 69.5 | 大分県立芸術会館 |
| | **小代　為重** | | | |
| 26 | 少女像 | 1897（明30） | 33.0× 24.0 | 佐賀県立美術館 |
| 27 | テームズ河畔 | 1900（明33） | 22.5× 32.0 | 〃 |
| 28 | J.F.ガウチャー像 | 1907（明40） | 60.8× 45.8 | 青山学院 |
| 29 | 湖来風景 | 1932（昭７） | 89.0× 80.0 | 〃 |
| 30 | 菊花 | 1932（昭７） | 80.7× 65.0 | 〃 |

48. 残曛（下絵）

53. 老　人　像

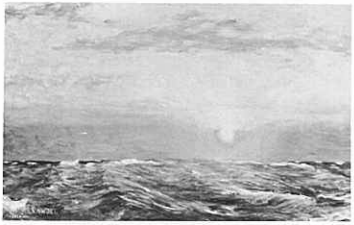
59. 老　人　像

| No. | 作品名 | 制作年 | 寸法 | 所蔵 |
|---|---|---|---|---|
| | **黒田　清輝** | | | |
| 31 | 画室内 | 1889（明22） | 40.5× 32.0 | 佐賀県立美術館 |
| 32 | 自画像 | 1889（明22） | 31.0× 23.5 | 鹿児島市立美術館 |
| 33 | 裸婦 | 1889（明22） | 78.8× 54.0 | 東京国立文化財研究所 |
| 34 | 針仕事 | 1890（明23） | 80.0× 64.5 | 石橋美術館 |
| 35 | 編物 | 1891（明24） | 48.7× 59.2 | 東京国立文化財研究所 |
| 36 | 婦人図（厨房） | 1891-92（明24-25） | 180.0×114.0 | 東京芸大芸術資料館 |
| 37 | 枯れ野原（グレー） | 1891（明24）頃 | 49.3× 65.0 | 東京国立文化財研究所 |
| 38 | 草つむ女 | 1892（明25） | 89.0×103.5 | 富士美術館 |
| 39 | 昼寝 | 1894（明27） | 49.8× 61.0 | 東京国立文化財研究所 |
| 40 | 昔語り下絵（舞妓） | 1896（明29） | 93.2× 46.0 | 〃 |
| 41 | 鉄砲百合 | 1909（明42） | 61.5× 81.0 | 石橋美術館 |
| 42 | 瓶花 | 1912-13（大元-2） | 77.0× 71.0 | 東京国立博物館 |
| | **久米桂一郎** | | | |
| 43 | 林檎拾い | 1891（明24） | 115.2× 87.8 | 久米美術館 |
| 44 | 長田秋濤像 | 1892（明25） | 63.7× 53.6 | 〃 |
| 45 | 清水寺 | 1893（明26） | 60.8× 73.0 | 〃 |
| 46 | 少女 | 1894（明27） | 34.8× 25.8 | 〃 |
| 47 | 秋景 | 1895（明28） | 99.2× 73.0 | 〃 |
| 48 | 残曛（下絵） | 1898（明31） | 35.5× 45.5 | 佐賀県立美術館 |
| 49 | 男裸体（習作） | 年代未詳 | 80.3× 65.1 | 東京都美術館 |
| | **藤島　武二** | | | |
| 50 | 天平の面影 | 1902（明35） | 198.5× 94.0 | 石橋美術館 |
| 51 | 裸体（習作） | 1906（明39） | 80.3× 53.0 | 鹿児島市立美術館 |
| 52 | ヴェルサイユ風景 | 1906-7（明39-40） | 69.8× 89.0 | 石橋美術館 |
| 53 | 老人像 | 1908-9（明41-42） | 59.0× 43.7 | 佐賀県立美術館 |
| 54 | ヴィラ・デステの池 | 1908-9（明41-42） | 22.7× 32.0 | 石橋美術館 |
| 55 | 噴水 | 1908-9（明41-42） | 33.0× 23.5 | 鹿児島市立美術館 |
| 56 | 山中湖畔の朝 | 1916（大5） | 60.0× 79.0 | 福岡県文化会館 |
| 57 | 裸婦 | 年代未詳 | 63.0× 51.0 | 佐賀県立美術館 |
| | **岡田三郎助** | | | |
| 58 | 西洋婦人像 | 1900（明33） | 45.4× 37.9 | 佐賀県立美術館 |
| 59 | 老人像 | 1901（明34） | 65.3× 48.5 | 〃 |
| 60 | 婦人像 | 1909（明42） | 40.0× 52.0 | 福岡県文化会館 |
| 61 | 大隈侯夫人像 | 1909（明42） | 91.5× 60.6 | 早稲田大学 |
| 62 | 若き娘の顔 | 1913（大2） | 45.4× 33.0 | 佐賀大学 |
| 63 | 花野 | 1917（大6） | 65.5× 91.5 | |
| 64 | 庭 | 1919（大8） | 45.5× 33.3 | 佐賀県立美術館 |
| | **中沢　弘光** | | | |
| 65 | 山の湯 | 1913（大2） | 76.0× 49.0 | |
| 66 | 花吹雪 | 1917（大6） | 60.0× 80.3 | 宮崎県総合博物館 |
| 67 | 朝鮮歌妓 | 1917（大6） | 130.3× 80.3 | 〃 |
| 68 | カフェの女 | 1920（大9） | 80.3× 60.6 | 〃 |
| | **和田　英作** | | | |
| 69 | 秋草 | 1897（明30） | 28.5× 42.5 | 東京芸大芸術資料館 |
| 70 | 渡頭の夕暮 | 1897（明30） | 127.5×189.5 | 〃 |
| 71 | 読書 | 1902（明35） | 73.0× 53.5 | 石橋美術館 |
| 72 | 富士 | 1912（大元） | 33.5× 45.4 | 鹿児島市立美術館 |
| 73 | 赤いマッチ | 1914（大3） | 80.3× 65.2 | 〃 |
| 74 | 婦人像 | 1919（大8） | 79.0× 64.0 | 松下美術館 |
| 75 | 裸体（習作） | 1902（明35） | 72.7× 53.0 | 東京都美術館 |
| | **吉田　博** | | | |
| 76 | 新月 | 1907（明40） | 59.5× 79.5 | 東京国立近代美術館 |
| 77 | 雲表 | 1909（明42） | 67.5×102.0 | 福岡県文化会館 |
| 78 | 渓流 | 1910（明43） | 112.1×162.1 | 福岡市美術館 |
| 79 | 山の風景 | 年代未詳 | 80.0× 60.0 | 福岡県文化会館 |
| | **山本森之助** | | | |
| 80 | 林間草花 | 1898（明31） | 61.5× 75.5 | 東京芸大芸術資料館 |
| 81 | 首里の夕月 | 1902（明35） | 92.5× 73.7 | |
| 82 | 琉球の灯台 | 1902（明35） | 24.3× 33.4 | 東京芸大芸術資料館 |
| 83 | 曲浦 | 1908（明41） | 60.5× 81.0 | 東京国立近代美術館 |
| 84 | 中禅寺湖 | 1919（大8） | 38.0× 45.5 | 長崎県立美術博物館 |
| | **高木　背水** | | | |
| 85 | 少女像 | 1896（明29） | 48.8× 36.8 | 東京芸大芸術資料館 |
| 86 | 英国風景 | 1911（明44） | 35.5× 50.9 | |
| 87 | 婦人肖像 | 大正初年 | 96.6× 71.3 | |

| No | 作品名 | 制作年 | 寸法 | 所蔵 |
|---|---|---|---|---|
| | **坂本繁二郎** | | | |
| 88 | 大島の一部 | 1906（明39） | 116.1× 72.8 | 福岡市美術館 |
| 89 | 魚を持って来た海女 | 1913（大2） | 117.0× 80.5 | 石橋美術館 |
| 90 | 髪洗い | 1917（大6） | 81.0× 61.0 | 大原美術館 |
| | **青木　繁** | | | |
| 91 | 輪転 | 1903（明36） | 27.3× 37.6 | 石橋美術館 |
| 92 | 海の幸 | 1904（明37） | 69.0×181.5 | 〃 |
| 93 | 海 | 1904（明37） | 36.5× 73.0 | |
| 94 | わだつみのいろこの宮 | 1907（明40） | 181.5× 70.0 | 石橋美術館 |
| 95 | 朝日 | 1910（明43） | 73.0×115.0 | 黄城会(小城高校同窓会) |
| 96 | 夕焼けの海 | 1910（明43） | 40.5× 50.6 | |
| | **和田　三造** | | | |
| 97 | 自画像 | 1904（明37） | 60.6× 50.0 | 東京芸大芸術資料館 |
| 98 | 裸婦 | 1911（明44） | 59.5× 49.2 | 出光美術館 |
| 99 | 踊り子 | 1914（大3） | 50.5× 28.0 | |
| 100 | 婦人像 | 1914(大3)頃 | 47.2× 34.7 | |
| | **渡辺　与平** | | | |
| 101 | 金さんと赤 | 1908（明41） | 103.7×147.5 | 長崎県立美術博物館 |
| 102 | 帯 | 1911（明44） | 162.0× 97.0 | 〃 |
| | **片多　徳郎** | | | |
| 103 | 病める父親と其子 | 1913（大2） | 60.5× 79.0 | 大分県立芸術会館 |
| 104 | 夏山急雨 | 1914（大3） | 75.0×195.5 | |
| | **森　三美** | | | |
| 105 | 海岸風景 | 年代未詳 | 22.4× 31.5 | |
| 106 | 農夫 | 〃 | 31.5× 22.2 | |
| | **青木　弊蔵** | | | |
| 107 | 孔子画像 | 1902（明35） | 125.8× 88.6 | 済々黌高校 |
| 108 | 朝暾の図 | 1908（明41） | 41.0× 60.8 | 〃 |
| | **時任　鵬熊** | | | |
| 109 | 男裸体 | 1900（明33） | 45.5× 33.3 | 鹿児島市立美術館 |
| 110 | 谷中の墓地 | 1901（明34） | 38.0× 55.5 | 〃 |
| 111 | 武者姿（習作） | 1901（明34） | 60.6× 43.9 | 黎明館 |
| 112 | 女人（装束） | 1901（明34） | 60.7× 45.6 | 〃 |
| | **庄野　伊甫** | | | |
| 113 | 笛の音 | 1907（明40） | 82.7× 78.3 | 福岡県文化会館 |
| | **伊達孝太郎** | | | |
| 114 | メリー・ツーリッチ像 | 1917（大6） | 象牙8.5×6.5 | 鹿児島市立美術館 |
| 115 | ルシー・ヴェヌワー像 | 1917（大6） | 〃 9.0×7.0 | 〃 |
| 116 | 松平子爵夫人像 | 1921（大10） | 〃 8.0×6.0 | 〃 |

83. 曲浦

101. 金さんと赤



95. 朝日

9. 臥裸婦

会期中作品の一部展示替えを行います。

10月9日～23日

百武兼行「臥裸婦」

藤島武二「天平の面影」

10月9日～16日

青木　繁「海の幸」（重文）

10月29日～11月6日

青木　繁「わだつみのいろこの宮」（重文）

## 作家解説

**床次正精**（とこなみまさよし）　1842（天保13）～97（明治30）

鹿児島市に生まれる。幼名兄玉宗次郎。幼いころ狩野派の能勢心斎に学ぶ。慶応元年藩命で長崎に出張し、イギリスの軍艦内ではじめて洋画を見る。明治４年上京、翌年司法省にはいり、明治９年宮城上等裁判所検事となる。このころ東京から洋画家梶原昇が来たので共に洋画を研究する。明治12年来日したアメリカの前大統領グラントの肖像を写真から描き、以後画家として知られるようになる。明治22年勅命で憲法発布式場、御祝宴の図を描く。

黒田清輝「故床次正精君」光風211、明治39年１月
前田蓮山（編）『床次竹二郎伝』床次竹二郎伝記刊行会、昭和14年

**百武兼行**（ひゃくたけかねゆき）　1842（天保13）～84（明治17）

佐賀市に生まれる。幼名安太郎。８歳のときのちの藩主鍋島直大の御相手役に選ばれる。明治４年政府派遣欧米視察団に同行した直大と欧米に渡り、ロンドンで経済学を学ぶ。以後ロンドンからパリ、ローマと公務のかたわら絵画修業を続ける。作品は明治９年頃のものが最もはやく、風景画から人物画への作画過程をうかがい知ることができる。明治15年帰国。農商務省に出仕したが、翌年ころから胸をわずらい、郷里で死去。享年42。

三輪英夫『百武兼行』近代の美術53、昭和54年７月

**諫山麗吉**（いさやまれいきち）　1849（嘉永２）～1906（明治39年）

中津に生まれる。明治８年国沢新九郎の彰技堂に入門し洋画を学ぶ。後年交誼を結ぶ浅井忠は、翌９年同門に入る。明治10年第１回内国勧業博覧会で「王子村割烹店の図」が褒賞を受ける。同13年上海に渡り、さらにロンドンその後パリへと移る。この間本野一郎駐仏公使の知遇を受ける。もともと南画を得意とし、モナコ王国のもとめで同王室の天井に蘆雁の図を描いたといわれる。また師国沢新九郎没後その碑文を書す。パリに病没する。

本多錦吉郎『洋風美術家小伝』明治41年３月
「大分県出身作家調査報告書―昭和55年度」大分県立芸術会館

**藤雅三**（ふじまさぞう）　1853（嘉永６）～1916（大正５）

臼杵市に生まれる。明治９年10月彰技堂に入門するが、同年11月工部美術学校に入学。本格的に洋画を学ぶ。同17年久米桂一郎にコンテ（擦筆）による石膏写生を指導する。翌年渡仏。ラファエル・コランの作品「花月」を見て感銘し師事することを決心。このとき法律研究のため留学していた黒田清輝に通訳を依頼したことが黒田が画家となるきっかけとなる。明治21年サロンに「破れズボン」が入選。のち陶器の研究にたずさわる。ニューヨークで没す。

「大分県出身作家調査報告書―昭和57年度」大分県立芸術会館

**曾山（大野）幸彦**（そやまおおのゆきひこ）　1857（安政４）～92（明治25）

鹿児島市に生まれる。明治11年工部美術学校に入学しサン・ジョヴァンニに師事する。同16年修業。工科大学博物館で画学を教え、同21年工科大学助教授となる。一方明治17年松室重剛、堀江正章らと画学専門学校を設立したが１年ほどで廃校。明治22年明治美術会の創立に参加。このころ鹿児島出身の大野家の養子となり大野義康と改める。松室、堀江の画塾「大幸館」は大野の私塾をうけついだもので、藤島武二、岡田三郎助らが育った。

青木茂「フォンタネージと工部美術学校」近代の美術46、昭和53年５月

**彭城貞徳**（かきさていとく）　1858（安政５）～1939（昭和14）

長崎市に生まれる。本名亀松。彭城家は明の帰化人を祖先とする歴代唐通事の家柄である。６歳の頃四書五経を学び、明治２年11歳の頃長崎広運館にフランス語を学ぶ。同４・５年頃京都府欧学舎でさらにフランス語を学び、ここで見たナポレオン３世の油絵肖像画に触発される。同８年高橋由一の天絵社に入門。工部美術学校創設とともに入学するが、同11年頃退学、石版、仏画の下絵を描く職につく。同20年帰郷、画塾を開く。大正４年頃絵を断念。

「長崎県立美術博物館報―昭和46年度」昭和47年３月
青木茂、前掲書

**吉田嘉三郎**（よしだかさぶろう）　1861（文久元）～94（明治27）

中津に生まれる。幼いころから絵を好み、はじめ京都の田村宗立に師事して三年間洋画を学ぶ。その後東京に出て本多錦吉郎の彰技堂に入門する。明治14年第２回内国勧業博覧会に油彩画を出品。同15年、17年の内国絵画共進会に日本画を出品する。同22年から３年間福岡県立修猷館中学で図画を指導する。このころ旧黒田藩主の肖像画を描く。明治美術会通常会員。また数種の中学図画教科書を著す。久留米出身の吉田博は彼の養子である。

「大分県出身作家調査報告書―昭和55年度」大分県立芸術会館、「近代洋画と福岡県」図録、福岡県文化会館、昭和55年

**小代為重**（しょうだいためしげ）　1861（文久元）～1951（昭和26）

佐賀市に生まれる。旧姓中野。明治８年上京、慶応義塾幼稚舎に入り、本科を中途退学し工部省修技校に学ぶ。明治16年小代家へ養子として入籍。この頃百武兼行の指導をうける。同年千葉師範学校助教諭、同18年中学校、師範学校の図画教官となる。同19年工部大学の造家学教室で曾山幸彦と建築装飾の教鞭をとる。明治22年明治美術会の創立に加わる。同29年白馬会結成に参加。同33年パリに遊学。その後作品は少ない。帰国後青山学院に勤務。

「日本美術年鑑」東京国立文化財研究所美術部、昭和31年１月、小代為重「明治洋画壇の追憶」肥前協会46、昭和13年２月

**黒田清輝**（くろだせいき）　1866（慶応２）～1924（大正13）

鹿児島市に生まれる。明治５年上京。同11年日本画初歩、鉛筆画、水彩画を学ぶ。明治17年法律研究のため渡仏。翌年藤雅三を知り、ラファエル・コランを知るきっかけとなる。明治19年コランに入門、久米桂一郎とも親交をむすぶ。同26年帰国。翌年天真道場設置、同29年白馬会を結成する。明治31年東京美術学校教授。明治43年帝室技芸員、大正８年帝国美術院会員、同９年貴族員議員と

なり、同11年森鷗外死去のあと帝国美術院院長に就任。

「黒田清輝展」図録、日本経済新聞社、昭和40年

**久米桂一郎**　1866（慶応２年）～1934（昭和９）

佐賀市に生まれる。明治７年上京。同14年第２回内国勧業博覧会出品の油絵を見て西洋画学習の念を起し、藤雅三に師事する。同19年渡仏、ラファエル・コランに入門。この頃黒田清輝を知る。同26年帰国。黒田と共に天真道場の開設から白馬会創立と画壇に新風を吹き込む。明治31年東京美術学校教授となる。大正11年帝国美術院幹事に任命される。中期以後は制作の場から離れ、美術行政家、教育者として活躍する。

「久米美術館蔵品図録」久米美術館、昭和57年

**藤島武二**　1867（慶応３）～1943（昭和18）

鹿児島市に生まれる。鹿児島中学校時代四条派の平山東岳に日本画を学ぶ。明治18年上京。川端玉章に入門する。明治20年東洋絵画共進会で１等褒状をうける。同23年曾山幸彦の門に入り洋画に専念する。翌年山本芳翠の生巧館画塾にはいる。同29年白馬会会員。同38年から４年間フランス、イタリアに留学。この時期「黒扇」を描く。大正元年本郷洋画研究所設立。同２年から川端画学校洋画部を指導。昭和12年文化勲章受章。帝国芸術院会員。

「藤島武二展」図録、三重県立美術館、昭和58年４月

**岡田三郎助**　1869（明治２）～1939（昭和14）

佐賀市に生まれる。旧姓石尾。幼時上京。百武の油絵に影響を受ける。明治20年曾山幸彦の画塾に入り洋画を学ぶ。同27年天真道場に入門、翌年の第４回内国勧業博覧会で「初冬晩暉」が３等賞を受ける。同29年白馬会創立に参加。９月東京美術学校助教授となる。明治30年渡仏、ラファエル・コランに就く。大正元年藤島武二と本郷洋画研究所を設立。白馬会、文展、帝展、光風会展で活躍。昭和９年帝室技芸員。昭和12年文化勲章を受ける。

「岡田三郎助展」図録、佐賀県立博物館、佐賀新聞社、昭和54年

**中沢弘光**　1874（明治７）～1964（昭和39）

東京都に生まれる。父は宮崎佐土原藩出身。明治20年曾山幸彦の画塾に入門。同25年から堀江正章の指導を受ける。同29年東京美術学校西洋画科に入学し黒田清輝に師事する。同33年卒業。同期生に矢崎千代治、庄野宗之助がいた。白馬会に参加。この頃高木背水と写生旅行する。第１回文展出品作「夏」が３等賞を受ける。以後官設展を中心に活躍。また光風会（大正元年）、白日会（大正13年）を創立。昭和32年文化功労者となる。帝国芸術院会員。

「中沢弘光展」図録、奈良県立美術館、昭和55年

**和田英作**　1874（明治７）～1959（昭和34）

鹿児島県垂水市に生まれる。明治12年頃上京。同20年明治学院に入学、上杉熊松に洋画の初歩を学ぶ。同24年曾山幸彦の門に入るが、翌年曾山逝去のため原田直次郎の鍾美館に転ず。明治27年黒田清輝の天真道場に学ぶ。同30年東京美術学校西洋画科選科第４年級に入学、同年７月修了、同科教授助手に任じられる。創立時からの白馬会会員。明治33年パリ留学。ラファエル・コランの指導を受ける。昭和12年帝国芸術院会員。昭和18年文化勲章受章。

「和田英作遺作展」図録、朝日新聞社、昭和36年４月

**吉田博**　1876（明治９）～1950（昭和25）

久留米市に生まれる。旧姓上田。明治20年修猷館中学に入学。図画教師の吉田嘉三郎の養子となる。明治26年京都の田村宗立の門に入る。翌年上京、不同舎に学ぶ。明治32年アメリカ、ヨーロッパへ渡航。帰国後明治35年太平洋画会を創立する。文展、帝展、新文展と一貫して活躍。一方大正９年版元の渡辺庄三郎を知り本格的に木版画の制作にとりくむ。昭和８年筑前美術協会の創立に参加。同11年足立源一郎らと日本山岳画協会を結成する。

「吉田博木版画展」図録、福岡市美術館協会、昭和51年

「近代洋画と福岡県」図録、福岡県文化会館、昭和55年

**山本森之助**　1877（明治10）～1928（昭和３）

長崎市に生まれる。明治27年大阪に出て山内愚僊に師事。翌年上京、明治美術学校研究所に入り、かたわら天真道場に通う。同29年東京美術学校西洋画科に入学。明治32年卒業、同期生に赤松麟作がいた。同34年沖縄県立中学校へ図画科教官として赴任、２年後退職して上京する。明治40年東京府勧業博覧会で１等賞を受ける。文展に第１回から出品し入選をつづけ第４回から審査員をつとめる。大正元年光風会の創立に参加。大正11年外遊。

「山本森之助洋画展」図録、長崎県立美術博物館、昭和47年

**高木背水**　1877（明治10）～1943（昭和18）

佐賀市に生まれる。本名誠一郎。背水は雅号。明治22年上京。赤坂高等小学校に入学する。明治27年大幸館に入門し、のち白馬会研究所に入る。明治36年ベルツ博士の朝鮮行に同行する。明治37年渡米(同39年帰国)。明治43年渡英。大正元年帰国後、画塾を開く。門人に松本弘二がいた。この頃明治天皇像を制作する。大正５年朝鮮に渡り画室を建てる。大正８年帰国。以後数回外遊する。はじめ文展に出品するが、のち光風会、白日会に出品する。

「高木背水展」図録、佐賀県立博物館、昭和57年

**坂本繁二郎**　1822（明治15）～1969（昭和44）

久留米市に生まれる。久留米高等小学校時代森三美に洋画を学ぶ。明治35年帰省中の青木繁に触発されて上京、不同舎に入門する。同37年新設の太平洋画会研究所に学び、以後太平洋画会、文展に出品する。大正３年二科会の創立に参加、昭和19年同会の解散を機に、その後は団体に所属することなく創作活動をつづけ、日本国際美術展、ベニス・ビエンナーレ展などに出品。昭和31年文化勲章をうける。福岡県の美術界に多大の功績を残す。

「坂本繁二郎展」図録、東京国立近代美術館、昭和57年

**青木繁**　1882（明治15）～1911（明治44）

久留米市に生まれる。久留米高等小学校から中学明善校へ進む。この頃森三美につき洋画を習う。明治32年上京不同舎に入門。翌年東京美術学校西洋画科に入学。同期

生に和田三造、能谷守一、児島虎次郎、山下新太郎がいた。在学中第8回白馬会展（明治36年）で第1回白馬会賞を受ける。翌37年美校を卒業、夏、房州布良に遊び「海の幸」を制作する。このころ蒲原有明と交遊する。しかし後年失意の中に帰郷、天草、佐賀を放浪、病苦に倒れる。

「青木　繁＝明治浪漫主義とイギリス」図録、石橋美術館、昭和58年

**和田三造**（わだ さぞう）　1883（明治16）～1967（昭和42）

兵庫県に生まれる。明治29年福岡市の小学校に転入。同30年中学修猷館に入学する。翌年退学して上京。白馬会洋画研究所に入る。このころ中沢弘光、高木背水を知る。同34年東京美術学校西洋画科に入学。同37年卒業する。明治40年第1回文展で「南風」が最高賞を受ける。明治42年から6年間ヨーロッパに留学し、洋画とあわせて工芸図案の研究に従事。帰国後図案、染色への関心を示し、日本画の制作も行う。昭和2年日本標準色協会創立。

「和田三造展」図録、北九州市立美術後、昭和54年

**渡辺与平**（わたなべ よへい）　1889（明治22）～1912（大正元）

長崎市に生まれる。旧姓宮崎。はじめ日本画を学ぶため京都美術工芸学校に入学。卒業後、明治39年上京し、太平洋画会の研究所に通い本格的に洋画を研究する。研究所ではとくに中村不折に指導を受けたという。明治41年第2回文展に「金さんと赤」を出品、初入選する。第4回、第5回の文展でも引きつづき入選し将来を嘱望されたが、24歳の若さで病没。他に、「コマ絵」とよばれるカット画を描き、竹久夢二と対比され「与平式」とよばれる。

「長崎県立美術博物館だより」第6号、昭和48年

「三画人追想」長崎談叢第18輯、昭和11年8月

**片多徳郎**（かた だ とく ろう）　1889（明治22）～1934（昭和9）

大分県豊後高田市に生まれる。明34年大分中学校へ入学。在学中美術教師松本古村に指導を受ける。明治40年東京美術学校西洋画科に入学。同級生に萬鉄五郎、御厨純一、北島浅一らがいた。明治45年卒業。在学中文展に「夜の自画像」で初入選。以後文展、帝展に出品する。大正11年第4回帝展に審査員となり第6回、9回、11回展と審査員をつとめる。昭和4年第1回第一美術協会展に参加。後年、日本画的装飾表現を目ざす。

「片多徳郎・遠山五郎展」図録、北九州市立美術館、昭和54年

**森三美**（もり みよし）　1872（明治5）～1913（大正2）

久留米市に生まれる。久留米中学から明治20年京都府画学校（西洋画担当　田村宗立）に入学。翌年小山三造に師事し洋画を学ぶ。同24年久留米にもどり、同27年から久留米高等小学校で図画を教える。この久留米時代に坂本繁二郎、青木繁らに油絵を手ほどきする。その後東筑中学に赴任。同40年佐賀県立佐賀中学に移る。あわせて佐賀農学校教員を嘱託さる。以後佐賀に在住。明治42年7月青木繁が訪ねて来る。これが青木晩年の佐賀放浪の最初である。

「森　三美一作品と資料」石橋美術館、昭和56年

**青木繁蔵**（あお き つね ぞう）　1872（明治5）～1940（昭和15）

熊本市に生まれる。第五高等中学校を退学、洋画を志して同校の笠井直について学ぶ。明治25年上京、小山正太郎の「不同舎」に入学。同27年まで洋画を学ぶ。同年9月より大正3年まで郷里の済々黌で図画と修身を教える。この年九州学院へ転じ昭和10年まで図画を指導する。この間「九州美術会」を組織し、熊本における最初の公募展覧会「九州美術展覧会」を開催、熊本の美術活動の発展に努める。晩年は水墨画も描いている。

「熊本の近代洋画」図録、熊本県立美術館、昭和57年10月

**時任鵬熊**（とき とう わし くま）　1874（明治7）～1932（昭和7）

鹿児島県横川町に生まれる。菱刈町時任家の養子となる。明治24年から翌年まで鹿児島博約義塾に学ぶ。同29年鹿児島尋常師範学校農業専科講習科を卒業後上京し、黒田清輝のもとで洋画を修業する。明治31年東京美術学校西洋画科に入学。同35年卒業する。雅号に「霧山」とある。在学中生徒成績品展覧会で2等賞状、賞牌を受ける。卒業後は郷里に居を構えて中央画壇との縁を絶つ。作風は古典的な堅実な手法で、外光派風の作もみえる。

「時任鵬熊展」目録、鹿児島市立美術館、昭和51年

**庄野伊甫（宗之助）**（しょうの いほ）　1876（明治9）～1958（昭和33）

福岡市に生まれる。東京美術西洋画科で浅井忠に師事。明治33年同校卒業。中沢弘光、矢崎千代治が同級である。同39年まで同校研究科で洋画を研究、その間明治美術会展に出品。同36年第5回内国勧業博覧会で受賞する。その他バリ万博（明治35）セントルイス万博（明治37）にも入選。太平洋美術会展には第1回から第7回展まで出品を続け、大正初に帰郷し、大正11年大分県日田中学に赴任する。昭和8年帰郷、晩年は県美術協会会員として活躍。

「近代洋画と福岡県」図録、福岡県文化会館、昭和55年

**伊達孝太郎**（だて こうたろう）　1878（明治11）～1964（昭和39）

宮崎県高岡町に生まれる。明治28年宮崎県尋常師範学校講習科に入学。明治30年同校を卒業する。一方明治27年から同33年まで師範学校教諭梶原熊雄について画学を修業する。その後佐賀県の小城中学校へ赴任（明治34・4―35・7）。明治35年8月渡米し、セントルイス大学で絵を学ぶ。大正9年帰国。同11年郷里で個展を開く。裸体を得意とする。一時上京するも大震災にあい帰郷し、2年ほどで鹿児島へ移る。戦後、占領軍将校の肖像画を描く。

「宮崎の文化」毎日新聞連載、昭和49年3月1日～4月27日

## 行事のお知らせ

### 常　設　展

| 展覧会名 | 会期 | 内容 | 会場 |
|---|---|---|---|
| 佐賀県の歴史と文化展 | 10月8日<br>～3月31日 | 佐賀県の地質や自然、先史時代から近代にいたる歴史と文化について、自然史・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について、系統的に資料を展観。 | 博物館 |
| 近代の美術・工芸 | 12月20日<br>～3月31日 | 郷土出身作家の彫塑・陶磁・染織・金工などの代表的工芸品をはじめ百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助、小代為重、高木背水などの近代洋画、副島蒼海、中林梧竹などの近代書を紹介。 | 美術館 |

### 企　画　展

| 展覧会名 | 会期 | 内容 | 会場 |
|---|---|---|---|
| 日展 | 9月6日<br>～10月2日 | 日本の美を代表する総合美術展。日本画、洋画、写真、書、工芸等の作品。 | 博物館 |
| よみがえれ佐賀展 | 10月8日<br>～10月16日 | 幕末維新の佐賀の先人達を紹介し、佐賀の歴史をを学ぶ。 | 博物館 |
| 県政百年・佐賀県立美術館開館記念展「近代・九州の洋画家たち」 | 10月9日<br>～11月6日 | 明治から大正にかけて日本の近代洋画に大きな影響を与えた九州出身の洋画家の作品を紹介。 | 美術館 |
| 第4回佐賀県学生書道展 | 10月19日<br>～10月23日 | 県内の児童、生徒の書道展。 | 博物館 |
| 学童美術展 | 11月2日<br>～11月6日 | 県内の児童、生徒が制作した絵画、デザイン等を展示。 | 博物館 |
| 佐賀県高等学校芸術祭美術・書道展 | 11月13日<br>～11月20日 | 高校芸術祭の一環として、高校生の美術、書道部門の作品展。 | 博物館<br>美術館 |
| 佐賀県美術展 | 11月29日<br>～12月11日 | 県内公募による日本画、洋画、書道、写真、工芸、彫塑、デザイン等の作品を展示。 | 博物館<br>美術館 |
| 古代エジプト展 | 1月7日<br>～1月29日 | エジプト悠久五千年の歴史を一堂に展観。 | 美術館 |
| 書初め展 | 2月8日<br>～2月12日 | 小・中・高校生及び一般公募の書初め展。 | 美術館 |
| エマ会展 | 2月15日<br>～2月19日 | エマ会員の油絵、水彩画などの作品展。 | 美術館 |
| 佐賀大学教育学部<br>美術工芸科卒業制作展 | 2月22日<br>～2月26日 | 佐賀大学の卒業制作品、絵画、彫塑、工芸の各部門を展示。 | 美術館 |
| 九州グラフィックデザイン展 | 2月29日<br>～3月4日 | 九州及び沖縄のグラフィックデザイン作家と一般公募による作品展。 | 美術館 |


博物館・美術館報　第62号
発行年月日　昭和58年9月1日
編集　野村綱明
発行　佐賀市城内1丁目15～23
佐賀県立博物館
佐賀県立美術館
印刷　佐賀印刷社